

# 中学校への環境移行における予期不安・リアリティショックと 学校適応感との関連

南 雅則 井上 博之 浅川 潔司

## 問題と目的

児童生徒にとって小学校から中学校への移行は、友人関係の拡大と再構築、学級担任制から教科担任制への移行、部活動への参加、新しい学校の規則や生活スタイルの変化などにより、望むと望まざるとに関わらず新環境への適応を求められる事態の一つである。米澤・内藤・浅川・水撮(1985)によれば、小学校から中学校への移行は、小学校で構造化されていた個人の世界が一時的に崩壊し、中学校入学に伴って再構造化することが求められている事態であり、古川・小泉・浅川(1992)は、こうした環境移行は児童期から青年前期への心身の発達的变化と異なる校種への移行とが重なることから、児童生徒にとっては「二重の意味で危機的である」と指摘している。小中学校間の環境移行期の予期不安と学校適応感との関係を検討した南・浅川・秋光・西村(2011)によれば、中学校生活に対する予期不安は、学校生活に適応しようとする中で感じる不安からなる「社会・文化的不安」と、対人関係を構築していく上での不安からなる「対人的不安」の2つの下位領域からなることや、中学校入学前の不安が高いほど情緒的安定性を含めた学校適応感が低いことを明らかにしている。しかし、中学校生活予期不安尺度によって測定された予期不安と実際の中学校生活の中で感じる印象や経験とのズレについての検討はなされていなかった。よって本研究では、予期不安と実際の中学校生活での適応との関連を検討することを第一の目的とする。ところで半澤(2007)は、四年制大学の1・2年生を対象とした研究において、大学の学業に関する入学前のイメージと入学後の実際の経験の間のズレから生じた違和感を「学業に対するリアリティショック」と指摘している。このリアリティショックとは、環境への働きかけができないために生ずる不均衡状態であり、事前の予想と異なる実際の印象や経験によるショック反応であると考えられ、安定的な関係を再構築する必要に迫られる危機的な環境移行(Wapner et al.,1973)の一つであるといえるだろう。

そこで本研究では、環境移行期の中学校新入生の学校適応感については、リアリティショックとの関係も考慮しながら検討することとする。中学校での生活に対する予期不安が高くても実際の中学校生活が自分の予想していたようなものであれば、中学校生活に対してうまく適応できる可能性が高いが、その反対に、予期不安が低くても中学校での生活が自分の予想と異なり、その差を埋めることが容易でない場合には不適応状態になる可能性が大きいと思われるからである。本研究では、環境移行期の中学生の学校適応を促進する支援のあり方についての知見を得るために、中学校新入生の学校適応感を検討するための変数として、中学校生活に対する予期不安にリアリティショックを加え、学校適応感との関係を検討することとした。

## 方法

**研究協力者** 兵庫県A市立B中学校の中学1年生258名(男子139名,女子119名)

**調査時期** 2011年4月上旬(1回目),4月下旬(2回目),6月上旬(3回目)

**質問紙** ①中学校生活予期不安尺度:南他(2011)によって開発された尺度の項目を回想法で実施できるように修正したもの(16項目,4件法)を使用。②中学校生活リアリティ質問項目:予

期された不安項目の実際の学校生活における認知を測定するために、中学校生活予期不安尺度の質問項目を今どのように感じているのかを問う文に修正したもの（16項目、4件法）を使用。③学校生活適応感尺度：浅川・尾崎・古川（2003）によって中学生の学校適応感を測定するために開発された尺度（36項目、4件法）を使用。質問紙は、1回目調査では①、2回目調査では②③、3回目調査では③が用いられた。

## 結果

### 中学校生活予期不安尺度の因子分析結果と予期不安得点・リアリティショック得点の算出

中学校生活予期不安尺度について、中学校入学後に回想法で実施したことを考慮し、各項目得点の分布に著しい偏りがみられた4項目を除外した12項目について因子分析（主因子法－プロマックス回転）を行った。その結果、2因子12項目が抽出され、第1因子「教師関係不安」（8項目、 $\alpha=.81$ ）、第2因子「友人関係不安」（4項目、 $\alpha=.77$ ）と命名された。因子間相関を求めたところ  $r=.44$  であり、やや強い相関が認められた。下位尺度別の合計得点を算出するとともに、2つの下位尺度の合計得点を予期不安得点とした。

中学校生活リアリティ質問項目について、中学校生活予期不安尺度で得られた下位領域の実際の中学校生活における認知との関連性を考慮し、教師関係不安と対応する項目を教師関係リアリティ（8項目、 $\alpha=.72$ ）、友人関係不安と対応する項目を友人関係リアリティ（4項目、 $\alpha=.58$ ）とし下位領域得点を算出するとともに、その合計をリアリティショック得点とした。

学校適応感尺度の因子分析結果 学校生活適応感尺度について、4月の調査結果をもとに因子分

析（主因子法－バリマックス回転）を行った。その結果7因子35項目が検出された。浅川他(2003)にならない第1因子「部活動への意欲」、第2因子「教師との関係」、第3因子「家族との関係」、第4因子「自己肯定感」、第5因子「進路意識」、第6因子「友人関係」、第7因子「学習への意欲」と命名され、下位尺度別の得点が算出された。

### 予期不安・リアリティショックと学校適応感の関係

中学校生活に対する予期不安・リアリティショックと学校適応感との関係を検討するため、リアリティショック得点を制御変数とした予期不安得点と学校適応感下位尺度（4月・6月）との偏相関（Table1）と予期不安得点を制御変数としたリアリティショック得点と学校適応感下位尺度（4月・6月）との偏相関（Table2）を求めた。その結果、リアリティショック得点が低ければ学校適応感下位尺度得点は高く、リアリティショック得点が高ければ学校適応感下位尺度得点が低いという関係が認められた。しかし、予期不安得点については正と負の相関が存在しており一義的なものではなく、入学直後の4月においては予期不安得点が高いと自己肯定感を除く学校適応感下位尺度得点が高く、「不安があるから頑張る」とか「不安な状況に追い込むことで頑張る」というよう

Table1 4月と6月における予期不安と学校適応感下位尺度との偏相関関係

	4月	6月
部活動への意欲	.127 †	.019 <i>n.s.</i>
家族との関係	.144 *	.150 *
教師との関係	.232 **	.210 **
自己肯定感	-.376 ***	-.331 ***
友人関係	.193 **	.103 <i>n.s.</i>
進路意識	.190 **	.164 *
学習への意欲	.218 **	.193 **

\*\*\*  $p<.001$ , \*\*  $p<.01$ , \*  $p<.05$ , †  $p<.10$

Table2 4月と6月におけるリアリティショックと学校適応感下位尺度得点との偏相関関係

	4月	6月
部活動への意欲	-.478 ***	-.322 ***
家族との関係	-.426 ***	-.443 ***
教師との関係	-.608 ***	-.523 ***
自己肯定感	-.231 **	-.103 <i>n.s.</i>
友人関係	-.405 ***	-.357 ***
進路意識	-.337 ***	-.313 ***
学習への意欲	-.312 ***	-.319 ***

\*\*\*  $p<.001$ , \*\*  $p<.01$

な予期不安が能動的探索活動を動機づけている可能性が示唆された。

次に、予期不安・リアリティショック・学校生活適応感それぞれの下位尺度ごとの相関を4月と6月の別で求めた。その結果、予期不安下位尺度とリアリティショック下位尺度との相関は対人的不安と社会文化的リアリティを除きすべて有意であった (Table3)。また、リアリティショック下位尺度と学校生活適応感下位尺度との相関は6月の学習への意欲を除いてはすべて有意であったが、予期不安下位尺度との相関は自己肯定感にしかみられなかった。以上のことから予期不安を感じやすければリアリティショックを強く受け止めることとなり、リアリティショックの高さが学校生活適応感の低下に影響を与えていると考えられた。

Table3 予期不安・リアリティショック・学校適応感それぞれの下位尺度間の単相関係数

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11
1 教師関係不安	—	.440**	.427**	.254**	-0.1	-0.061	-0.123	-389**	-0.004	-0.006	0.03
2 友人関係不安	.440**	—	0.089	.408**	-0.062	-0.001	0.029	-508**	0.037	-0.038	0.094
3 教師関係リアリティ	.427**	0.089	—	.188**	-.357**	-.342**	-.559**	-.240**	-.272**	-.246**	-.242**
4 友人関係リアリティ	.254**	.408**	.188**	—	-.398**	-.200**	-.254**	-.438**	-.362**	-.182**	-0.039
5 部活動への意欲	-0.126	-0.073	-.286**	-.240**	—	.473**	.464**	0.073	.446**	.297**	.214**
6 家族との関係	-0.082	-0.043	-.380**	-.166*	.376**	—	.497**	0.045	.419**	.217**	.301**
7 教師との関係	-0.071	0.026	-.493**	-.218**	.371**	.519**	—	0.098	.374**	.423**	.490**
8 自己肯定感	-.338**	-.423**	-.171*	-.343**	0.058	-0.022	0.002	—	-0.02	0.054	-0.036
9 友人関係	-0.06	-0.053	-.252**	-.392**	.437**	.338**	.428**	0.083	—	.311**	.313**
10 進路意識	-0.01	-0.054	-.189**	-.188**	.242**	.311**	.362**	0.034	.355**	—	.441**
11 学習への意欲	0.058	0.078	-.288**	-0.069	.346**	.370**	.484**	-0.001	.314**	.444**	—

注：右上は4月、左下は6月 \*\*p<.01, \*p<.05

### 予期不安のリアリティショックを媒介とした学校生活適応感に対するパス解析

学校生活適応感に影響を与える要因の検討を行うため、4月と6月の学校生活適応感に対するパス解析を行った。その結果、4月では、教師関係不安・友人関係不安ともそれぞれ教師関係リアリティ・友人関係リアリティを経て学校適応感に負のパスが見られ、これは米澤他 (1985)、古川他 (1992)、南他 (2011) の研究結果をほぼ支持する結果であると思われる。しかし、友人関係不安から友人関係へは、友人関係リアリティを経た負のパスと直接の正のパスが見られ、友人関係不安は友人関係リアリティを経て友人関係に負の影響を与えるだけではなく、友人関係の構築に向けて直接働きかけていた (Figure1)。一方、6月では、教師関係リアリティから自己肯定感へのパスと、友人関係リアリティから教師との関係へのパスは見られず、さらに自己肯定感、教師との関係、部活動への意欲において4月とくらべ6月の標準化係数が低下していた。つまり予期不安はリアリティショックを介在して学校適応感に対して全体的には負の影響を与えているが、6月では4月下旬に感じていたリアリティショックの学校生活適応感に対する負の影響が弱くなっていた (Figure2)。

## 考察

### 中学校生活に対する予期不安ーリアリティショックと学校適応感との関係

リアリティショック得点が低ければ学校適応感下位尺度得点は高く、リアリティショック得点が高ければ学校適応感下位尺度得点が低いという関係が認められたが、予期不安得点については正と負の相関が存在しており一義的なものではなかった。南他 (2011) によれば、予期不安が低

ければ学校生活適応感は高く、その反対に予期不安が高ければ学校適応感が高いことや、男子は感情面での表出が苦手であるが、女子は環境に対する適応方略として不安を早期に表出すると報告されていたが、学校生活適応感の下位尺度全てで予期不安得点が高ければ適応感得点が低いわ

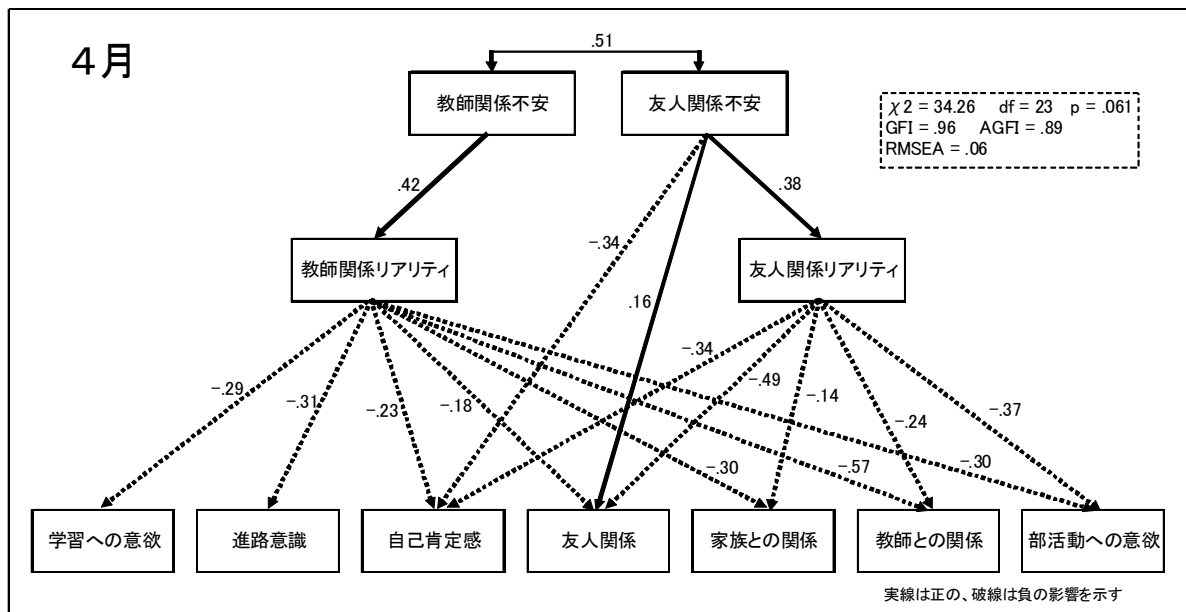


Figure1 予期不安・リアリティから学校生活適応感への影響のパス図(4月)

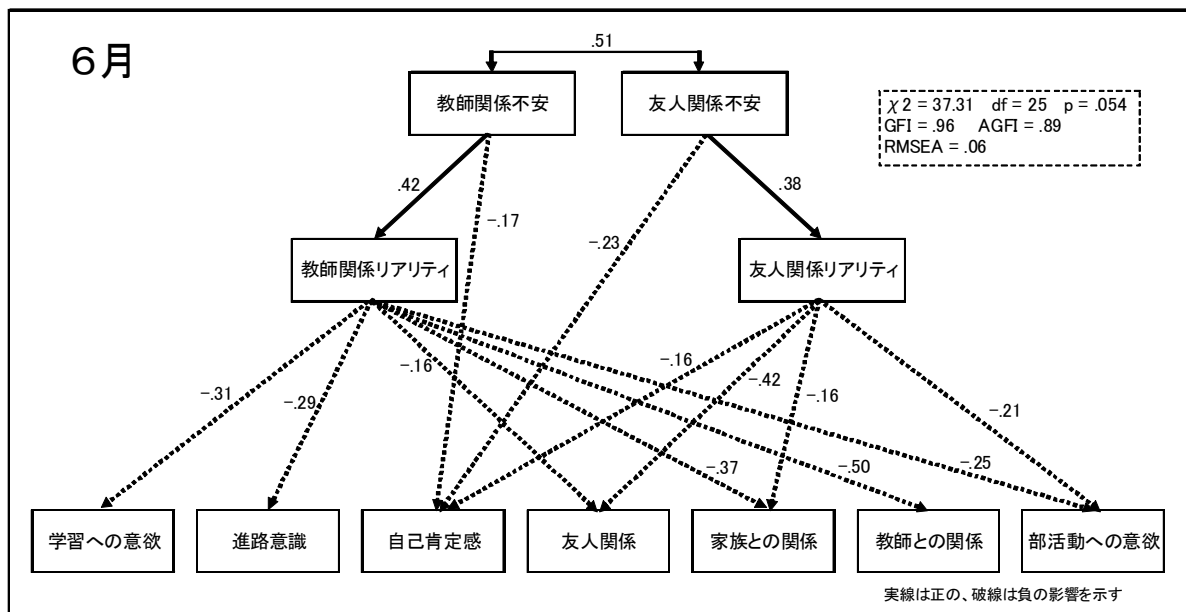


Figure2 予期不安・リアリティから学校生活適応感への影響のパス図(6月)

けではなかった。本研究においても、入学直後の4月においては予期不安得点が高いと自己肯定感を除く学校適応感下位尺度得点が高かった。これは「不安があるから頑張る」とか「不安な状況に追い込むことで頑張る」というように、「人間-環境システム (Wapner et al.,1973)」における、人はでたらめにではなく目的をめざして環境と相互交流を行い、目標 goals または目的 ends にしたがって環境を構造化する (Wapner & Demick, 1992) 行為の一つとして、予期不安が自己を奮い立たせる誘因として能動的探索活動を動機づけている可能性が考えられる。

本研究の結果から、小学校から中学校への環境移行期における予期不安の軽減とあわせて、中学

校入学時のリアリティショックの軽減が学校適応感の向上につながることを示唆された。移行後の新環境において、自分の予想と異なりその差を埋めることが容易でない場合、不適応状態になる可能性は認められたが、予期不安が高くても実際の中学校生活が自分の予想していたようなもの、つまりリアリティショックが低ければうまく適応できる可能性については確認することができず、この点については今後の検討課題である。